

今号は久々に、在宅介護における口腔ケアの成功例をご紹介します。執筆は元小山市役所の訪問指導員で、現在はマロニエ医療福祉専門学校で介護職の育成に尽力されている 渡辺 智子先生 にお願いました。なおバックナンバーや新規配信希望、特集内容のご要望、その他ご質問などは、下記までご連絡ください。



普通の食事で夏を乗り越えることができた！

・・・緊張を除き、開口を促す口腔ケアが成果に繋がる

開かない口が大きく開き、食事量が増えてお元気になられたクライアントの話です。

訪問看護の看護師から、本人の口の動きの悪さが気になるので、口の動きを向上させて食欲増進を図ることを目的とした“口腔リハビリテーションを重視した口腔ケア”ができないだろうか？ と相談を受けました。

そのクライアントは68歳の女性で、週三回人工透析を受けていました。日中は車椅子で過ごし、実の娘さんから介助を受けていました。かかりつけ医師からは、『今年の夏は超えられないだろう・・・』と言われましたが、介助者の娘さんは、なんとか元気になって欲しい！と願っていました。

実は前年の夏に、食欲が低下して氷しか受けつけなくなってしまったからです。エンシュアリキッド（保険適用の経管栄養食）を製氷皿で凍らせ、毎日その氷片をお口に入れてあげるとガリガリ砕いて溶かして食べて、何とか夏を乗り切ったとのことでした。食事はその氷の欠片それだけだったことから、主治医には『今年も暑い時期には食欲が低下し、昨年と同じような状態になれば夏は越せないだろう』と言われた訳です。

クライアントは大きくお口を開けても、人差し指一本分しか開きません。また、うまく言葉が出ず、噛み付く様子がみられました。歯は歯並びが悪い上に歯槽膿漏で長く延びてしまい、本人の拒否もあって口腔ケアは大変しづらい状況でした。

そこで専門的口腔ケアは、本人の苦痛にならないよう、また緊張が出ないように、まず顔面のマッサージから行いました。大きく開口させるため、顔面の緊張が取れてからお口を開けてもらい、介助用歯ブラシ「エラック541」を縦にして使用し、先端の部分を口腔底にゆっくり押し当てて10秒ほど圧迫刺激をします（柴田ひろみ；リハビリブラッシングより）。→図-1参照



図-1 口腔底の圧迫

その後「エラック541」を歯の面に90度に当てるようにして、小刻みにブラッシングをしてゆきます。歯並びが悪いので一本ずつ丁寧にいきます。→図-2参照

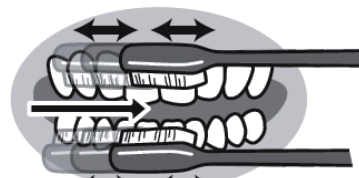


図-2 ブラッシングイメージ

拒否が強いために急いで雑に行っていた口腔ケアを見直し、緊張を除去して開口を促してから行うことを心がけるよう、娘さんに指導しました。娘さんに毎食後に磨いてもらい、私は月に一度モニタリングと評価に伺いました。

毎食後の口腔ケア時に圧迫刺激を行うことで、徐々に開口量が増えていきました。また、噛みつきも軽減していきました。歯槽膿漏の状態は現状を維持し、歯が動揺してくることはなかったです。

口が開けやすくなってからは、発語も聞き取れるようになり、コミュニケーションも取れるようになりました。食事量も増え、暑い夏となりましたが、氷に頼ることなく、普通の食事で乗り越えることができました。

